

○質問者 ああ、3号機ですね。ただ、実際に弁を開けてとかいう、そういう操作までには至っていないということですね。

○回答者 そういうことです。ここで基本的に、多分、本店が検討している放射線評価ですけれども、これはドライウェルベントを想定していると思います。

○質問者 のような感じですね。文脈からすると。

○回答者 そうです。ですから、この時点でドライウェルベントをイメージした評価を、本店の■■■君の方でやっていたという状況だったと思います。

○質問者 なるほど。では、検討にはもう入っていたという最中での3号機の爆発ということになったんですね。

○回答者 そうです。

○質問者 では、次、33。確認なんですけれども、3号機が、作業していたら、退避命令をかけて、それだけ危険な状況にあると。それは当然、保安院も官邸も、本店から電話を通じて、オンラインでも通じて、状況は刻々と耳に入っていてという状況の中で、これからごらんいただくところというのは、保安院とか官邸が、要するに、プレス発表の関係ですね。この時点でプレス発表を止めている、止めていないというところですね。

○回答者 プレス発表。

○質問者 要するに、これをごらんになって、何の場面かというところを思い出していただきたいんですが、3号機の状況に関する情報について、今、プレスを止めているんだというような。

○回答者 そんな話は初耳でございまして、33のところですか。

○質問者 はい。9ページ。そこからの流れ、若干まとまったところであるんで、ちょっとごらんいただいて、どういうあれだったのかというのを思い出せばお聞きしたいんで、お願いします。

(録画部分)

「1Fさん、聞こえますか。1Fさん」

「吉田です」

「今、二、三、保安院から官邸に向かって共同して処理していますが、今、プレスを止めているそうです。プレスを今、止めているんです。それで、とにかく補給が開始されるものをじっくり見守るということにしているそうなので、水の(・・・)などの状況について、常に官邸と共有しますから」

「はい。了解」

「聞いていなかった、ごめん、何を官邸と何とかと言ったの」

「今、官邸と保安院が、本来、プレスに流すんですけども、今、止めているそうです」

「何を止めているの」

「プレスへ流すのを」

「何を」

「情報を。今の」

「3号機の状況」

「はい。それで、こっちも状況をとにかく今、見守るということにしているそうなので、その状況を、時々刻々変わっているというのを二、三流すようにという指示です」

「了解」

「済みません、自衛隊から提供いただく給水車は満タンでございます」

「皆さん、これから一番重要なのは、各原子炉のパラメータをしっかりと見るということが一番重要。それから、線量をしっかりと時々刻々、変化を把握するということが重要で、これはまずキープしていきます。それから、今の対応策として一番重要な水ですね。補給水の確保について、どの段階まで来ているかということをお知らせしてください。水チームはややもするとここにいないので、必ず自分のミッションでいなくなる時は、だれか連絡員を置いて、聞かれたらすぐ答えられるようにしてください。今、聞きます。補給水は、ろ過水のこのラインナップと水張りにどれぐらいの時間、リベントを張るのに、どれぐらいの時間がかかるか、教えてください。だれに聞けばいいの」

○質問者 ここで一旦止めていただいて。ここだけ見るとちょっとまたあれで、これは入っていないんですけども、36番の6ページを見てみますと、その次の録音と同じで。

○回答者 9時52分から。

○質問者 9時52分からですね。

○回答者 わかりました。

○ 違いますね。ちょっとだけバージョンが違う。

○質問者 バージョン違うんですか。タイトル1、3分の1、清水社長とか、出てくるんですね。NHKの報道のことを言っている。本店の広報班が。

○回答者 清水社長が出てこなければだめなんです。ここだ。違うな。

○質問者 清水社長はその前から出てきます。その後ぐらいです。一番下に本店広報班とありますね。ここに、さっきのプレスを止めているという話なんですけれども、先ほど、保安院の方から、止められていったとお話をしましたと。福島第一3号機の関係で、格納容器圧力異常上昇に関する件ですが、先ほどNHKで、東京電力福島第一3号機の格納容器の圧力が非常に上がって、作業員が一時退避したという報道がなされて、マスコミからの質問が予想されますので、現状としては、スタンスとしてまず固めまして、できるのであればプレスをする。だめでも、このトーンで口頭で回答させてくださいということで調整をさせていただいていますというのがあって、この辺の流れを見ると、保安院とか、官邸の意向なのか、要するに、国側の方が、第一の3号機の格納容器が非常に圧力が上がってきたという、この状況に関して、うがった形になるのかもしれませんが。

○回答者 ちゅうちょしていますね。

○質問者 要するに、もう注水できているという状況にして公表しないと、それをしない段階でしてしまえば、そこでまた混乱というか、いたずらに国民の不安をあおってしまうというようなところが入って、それをそのまますぐには知らせなかったのかとも読めるようなところで、ただ、基本的には本店対応ということになるんですかね、ここは。

○回答者 なります。ここは私はほとんど記憶ないです。広報がどうしようが、プレスをするか、しないか、勝手にやってくれと、こっちは、現場は手いっぱいなんだからというポジションですから、しゃべっていることも、ほとんど耳に入っていないと思います。

○質問者 それでちょっと何か、あれっという感じだったんですね。

○回答者 はい。

○質問者 基本的には、ここであるところの本店の広報班などが中心となって、その辺りの報道関係の対応は。

○回答者 やると。それから、さっき[ ]が出てきましたけれども、彼が止められていますんで、止められていますんでと言っていたのは、本店の[ ]をやっている[ ]なんですけれども、彼は官庁連絡班長です。とがそこを止めるという話なので、広報班の方は、だれが言っているかわかりませんが、広報班長等がプレスをするという話と、官庁との連絡、そこでの話でありますので、どちらでも本店マターの話なので、発電所は知りません、こんなことは勝手にやってくれと、こういうことですね。

○質問者 要するに、国側の都合で、注水を始めたらずぐに知らせてくれ、その状況については刻々と知らせてもらって、恐らく報道のタイミングを図っているんだと思うんですね。それを本店の広報班なりが、[ ]さんかな、連絡する係が向こうに伝えて、タイミングを見計らってと思っていたら、NHKの報道で抜けてしまって、一時退避の事実がですね。それで、これを踏まえた対応をしなければならぬという流れになっていっているみたいなんですけれども、この辺はもう、現場としては、本店にお任せの。

○回答者 そうです。外の話はもうお任せで、うちはだから、圧力が上がるというのと、いつ水を補給しに行くかと。退避させた後ですね。そこだけで頭がいっぱいで、広報などは知りませんと、こういうことです。

○質問者 これは3月14日の午前中の話で、今は途中なんですけれども、省略してしまつて、次が36番のところですね。これは注水の優先順位ですね。時期的には、3月14日の10時半前後ぐらいの話ですね。

(録画部分)

「そんなことで、(・・・)も御了解いただければと思います。(・・・)よろしく願います」

「吉田君さ、先ほど武黒さんから電話があつて、官邸(・・・)ね。電話中なの」

「官邸(・・・)」

「官邸の決定指示事項というのは、武黒さんからありました。それで、3号の冷却を10

tで継続して、残りを、1号を優先して冷やせという指示がありました」

「わかりました」

「よろしくをお願いします」

「■■■■君、■■■■君、今のやつ、(・・・)手順を早く決めて、現場で3号機の冷却を落として、160ℓ /mに。それで1号機の冷却に入れということなんで、至急検討して、だれだ、■■■■と■■■■か。検討した結果、いつからやるかというのを私に報告ください」

○質問者 ここでちょっと。ここで、■■■■さんから、官邸の決定指示事項ということで、これは連絡などをずっとされていた■■■■になるんですね。

○回答者 違う。■■■■はフェローのタカハシです。

○質問者 別の方ですね。

○回答者 フェローの高橋は、小森がいないときに、小森の代わりに、本部長もオフサイトセンターへ行っていましたでしょう。本部長というのは、武藤ですね。本店で武藤本部長の代わりにやったのが、副本部長の小森です。小森がプレス対応だとか、外へ出たときは、小森の代わりに高橋フェローがやった。さっき言った■■■■というのは、ずっと官庁連絡班で、官庁対応の情報をやりとりしていたのが■■■■です。■■■■いるんで、ややこしいんですが、官邸の武黒から電話があったと言っている人間は高橋フェローです。

○質問者 では、実際、フェローの方の高橋さんと武黒さんが。

○回答者 何か連絡を取り合ったんだと思うんです。

○質問者 これは3号機の冷却を10tで継続してというのは、要するに、10t。

○回答者 パワーですね。

○質問者 パワーで水を入れるふうにして、残りの分は1号優先に冷やせという。

○回答者 まだ、この時点で3号だけにしか入れていない。さっきのあれで言うとですね。1号も入れろというのがこの指示で、そのときに、今、出ている、入れられる量の分で、3号機の方はまず10tして、残りの部分を1号に入れなさいと。1号の冷却も並行してやりなさいと、いわばそういう指示です。

○質問者 こういう、細かいと言うと語弊がありますがけれども、いろんなパラを見たりした上で、現場の方で、注水の中で、どういう性能でやっていくかとか、そういうふうにするような、そういうところについて、官邸から本店を通じて指示があったんですか。

○回答者 これは幾つか途中でもありまして、官邸の中でいろんな解析をしたですとか、保安院とか、私はよくわかりません。そこにいた人に聞いてもらわないとわからないんだけれども、解析屋とか何かそういう計算をしたり、1号機の注水をやめていると何時間ぐらいで危なくなるかとか、そういうことを確認計算した人がいるんだと思うんです。保安院なのか、安全委員会なのか知りません。私は聞いたこともないですから。そういうところの話があって、それが官邸辺りに、官邸のどこに行ったか知りませんが、そこから行って、武黒を経由して、こっちに来ていると思うんです。だから、向こうはこっち

は見えませんでした。

○質問者 いずれにしても、1号を優先して冷やせという、残りの部分はですね。実際、そういう方向で取りかかろうということになっていたんですね。

○回答者 はい。

○質問者 これは爆発の相当前になっているんですけれども、当時の状況としては、消防車が来て、物揚場から消防車を引っ張って直列に並べて、逆洗弁ピットの中で水を補給していくと。逆洗弁ピットの中から、1号と2号と3号に1台ないし3台という消防車を使って、それぞれに入れていくというラインをつけて、3号機爆発時も入れていたのは1号のみで、ほかはまだ待機状態という状況だったわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 3号機が爆発する前、ちょうどこのころとか、これよりちょっと前の10時台、要するに、退避命令が解除された後の作業中などは、9時20分に物揚場から補給するラインができ上がって、この時点で、例えば、素人考えで行くと、これで水がじゃぶじゃぶと逆洗弁ピットの中に海水が入っていくわけだから、2号はまだちょっとあれとしても、1号と3号は両方とも入れてしまえばいいのになとも思うんですけれども、この水量では賄えない。

○回答者 このとき、避難のタイミングはいつでしたか。

○質問者 避難が、恐らく3月14日の6時40分とか、そのころに退避命令を出しています。

○回答者 出しますね。解除はいつしたんですか。

○質問者 その解除がはっきりしない。これを見ると。どこかでもう行けという話になって。

○回答者 さっきのところ、行かせますよと言っていましたね。とりあえず水の補給だけは行かせますよという形で、水の補給でこのラインナップを完成したんだと思うんですけれども、記憶が本当にここは途切れてしまっていて、その次の爆発の話があるまでですね。

○質問者 この辺は、1号、2号、3号とあって、2号はまだ、一応、この時点では。

○回答者 2号はまだですね。

○質問者 だから、1号も水を入れなければいけないというのはわかっていますね。

○回答者 わかっています。わかっているんですが、そのとき、結局、ピットの水が少なくなっただけで、メーギャップしに行った。とりあえず3号機がかなり中断していた時間が長いので、3号機に水を入れ続けられないといけない。1号機は若干まだ余裕があるというのは、さっきの話ではないですけれども、今までの注水量がかなりの量入れていますから、そういう意味で余裕があるだろうという判断をしていたとは思いますが。

○質問者 そうすると、その判断の根拠からすれば、1号も時間が、2時間、3時間、4時間、5時間、6時間たっていけば、また再開しなければならないという頭にはなるんで

すね。

○回答者 それは勿論あります。

○質問者 だから、この官邸の決定指示事項ということがあるとないと問わず、いずれまた、2号がまだこういう状況であれば、3号をやって、ある時期からは1号も入れるということは当然頭にあったわけですね。

○回答者 あったと思います。

○質問者 次が、爆発の後、夕方ですね。

○回答者 42番ですか。

○質問者 42番ですね。今度は、3月14日、爆発して、今度、2号機の方もRCIC止まって、このころはベントをして、2号機のサブチェンの水温だとか圧力が非常に高いということから、ベントラインをきちんとつくって減圧操作をしましょうというような状況になっているところで、今からやるところの前のところに、所長のお言葉で、「済みません、吉田です。サイトの皆さん、聞いてください。もう一度、ちょっと頭を整理します。一応、今、計装の方で、2号機の減圧注水に向けて最後のベントラインを生かすという操作をやってもらっているところで、現時点の目標で言えば、TAFが17時30分という最新の予想が出てきましたので、17時、5時をもってSR弁を操作して減圧し、注水をするという操作に入っていくかどうかということを決めました」と。だから、今、この時点では、ベントラインを生かすという操作を減圧注水に向けてやっているという時期で、何とか、TAFが17時30分なので、その30分前である17時にはSR弁を操作して減圧して、水を入れていこうと、ゼロを切るのを防いで、水をどんどん入れていきたいと思いますというような決定のような形を出して、それで動きますというふうにしていた後のところからなんで、それをちょっとごらんいただけますか。

(録画部分)

「本店の高橋明男さんが1Fの吉田所長と話をしたいと言っていますので(・・・)」

「吉田さん、今、電話に出ています」

「今、官邸から、(・・・)か何かで、2号を起動しろ、注入を開始しろというのは行っているはずなんですよ。それを言おうと思ったんで、武黒さんを通じて、今、その話が行っているのではないかと思います」

「はい、わかりました」

「高橋さん、今、所長はその電話中です」

「済みません、本店に確認したんですけども、先ほど2Fで消防車を受け取って1Fへ持っていけと言われたんですが、来たのは消防士4人であって、消防車が来ていません。このまま行っていいんでしょうね」

「そのまま行ってください。消防自動車を打つんです。申し訳ありません」

「消防士を連れていけばいいんですね」

「そのとおりです。エステイマに乗ってきた消防士を連れて行ってください」

「わかりました。（・・・）連れていきます」

「ありがとうございます」

「増田所長」

「はい、増田です」

「皆さん、聞いて。本店の方も聞いてください。今、安全委員長の斑目先生から電話が来て、格納容器のベントラインを生かすよりも注水を先にすべきではないかと。要するに、減圧すると水は入っていくんだから、そこは待たないで、一刻も早く水を入れるべきだというサジェスションが安全委員長から来たんですが、そのサジェスションに対して、安全班、それでいいかしら、こういう中で」

「サプレッションチェンバの水温が130度を超えてきて、蒸気がサプレッションチェンバに落ちてでも恐らく凝縮しないということは減圧が見込めない。そうすると、（・・・）水がそれだけ（・・・）出てきて、多分、減圧できないということを恐れているというのが実態です」

「サプレッションチェンバは水温がもう100度を超えているんですよ」

「その話は斑目先生（・・・）」

「済みません。本店、          です。吉田所長」

「官邸から、水が入らない可能性が高いと（・・・）」

「吉田所長。          さん」

「はい」

「本店、          です。138度の経緯はわかっています。蒸気は200何十度ありますね。それが138度になると一旦水が落ちるんですよ。凝縮すれば確かに落ちますけれども、その結果として炉内圧力、若干上がると思います。だけれども、凝縮すれば、失われているということではないと思います」

「では、いいですか、これで」

「今の          君の話は上げる？」

「ベントを開ける前にやっちゃってもいいということ。もう冷却した方がいいという話ですね」

「いや、冷却ではなくて、ベントをすることは問題ないと思われているということです」

「今、違うんでしょう、冷やすの」

「違うんです。今の方では、ベントラインできる前に減圧して水を突っ込むべきだということを斑目先生がおっしゃっている」

「その場合の（・・・）は、サプレッションチェンバの水位がこのまま上昇を続けて、現在、水位不明だと思えますけれども、ウェットウェルベントラインが埋まるということの懸念があると思っています。現在も埋まっている可能性はあると思いますが、早目にベントしないと、ウェットウェルラインが生かせなくなるというところを懸念します」

「現場から言うと、斑目先生のおっしゃるとおりだと思っていいんですか」

「違う。違うんでしょう」

「サブチェンからのベントをトライすべきではないかということです」

「だから、サブチェンからのベントを今、トライしているんです」

「ですから、炉注を継続するというよりも、炉注は減圧してやるということを前提にベントをすべきではないかということです」

「ちょっと現場はわからないんだけど、斑目先生と所長、何が違うんだっけ。我々は、ベントは今しているわけよ」

「そういうことですね」

「それを冷やしてから減圧して注入しようとしているんだけど、斑目先生は、サブチェンからの減圧はベントラインを生かす必要はなくて、まず突っ込みなさいとおっしゃっているんですよ」

「そこは、あったんだと思うんですが、結局、最後に炉心損傷してしまった後のことを考えると、ドライウェルベントしかなくなるということに対する懸念で、先にまずサブチェンからのベントをやった方がいいんじゃないかと思うわけです」

「思うのはいいんだけど、今はもう時間がなくて」

「あっ、済みません」

「安全委員会委員長並びに保安院長並びに官邸の方から、もうすぐ操作やりなさいとおっしゃっているから、それでいいんですかと聞いているんです」

「今、要するに、残りとしては、100ミリ＋（・・・）1,000ミリで1,100ミリだと言ったら、一応、御納得はいただけたというふうに考えております」

「そういうこと。はい」

「だから、我々のやり方で認めていただいたということね」

「そういうふうに認識しております」

「それで、吉田君さ、さっきから言うと、大体、もうベント弁開いてなければいけない時間なんじゃないの」

「そうです。だから、そこを確認した。5時なんだけど、早くベント弁を開ければ（・・・）そこはどうなの」

「今、接続作業を行っています」

「えっ」

「まだです。待ってください」

「だから、ちょっと待ってくださいではわからないんだよ」

「できれば、可及的速やかに、5時を待たずにやるということも視野に入れてやるということでもいいですか」

「それでやってください」

「はい。わかりました」



「福島第一の保安グループからお願いします。1 Fで手伝ってもらった柏崎のメンバーが今、2 Fのビジター室の前にいます。ビジターハウスの前で、1 Fから来た人は、呼ばれているのに入れられないということで」

○回答者 これもどうでもいい。

○質問者 ちょっと止めてくれますか。その次のページ、本店の清水社長が出てくるんで、その辺りから。

(録画部分)

「(・・・)できないんで。ただし、5時なんだけれども、5時で取るんですが、ベントラインが動作できれば、可及的速やかに、5時を待たずにやるということも視野に入れてやるということでもいいですか」

「それでやってください」

「はい。わかりました」

「許可をもらいたいんですが」

「お願いします」

「済みません。今のラブチャーベントラインの(・・・)説明します」

「今、電源を投入したんですが、動きが感じられないということで、空気側はコンプレッサー動いておりますが、空気側の圧力が平坦でない可能性があるんで、今、確認をしなければいけないという状況です」

「これはどれぐらいのスピードで」

「これは圧が見えないので、動くまで待つしかないんで」

「吉田さん、清水です。斑目先生の方針で行ってください」

「はい。わかりました」

「それでやってください」

「■■■■さん、■■■■さん、今、話聞いていた？ラブチャーベントラインは時間がかかるんで、これはこれでやってくれ。(・・・)絶対重要だから、それはそれでやってください。ただし、これを待っていると、ますます燃料が危険な状態になってくる可能性があるから、操作の方に行くということでもいいですか」

「イエス。それでやってください」

「はい。本店の社長指示出ましたけれども、技術的に、武藤本部長、大丈夫ですか」

「大丈夫だよ」

「いいですか。もう一遍整理します」

○回答者 これは私ではないです。1 Fではないです。タカハシです。1 Fはだれも入っていない。高橋フェローです。本店です。

ここは、社長から言われたのは、何度も武藤本部長、大丈夫ですかと聞いているのは、社長を信用していないですから。技術屋ではないですから。だから、本部長、大丈夫ですかということを、技術的な念を押しているということなんです。武藤からの返事がなかったものですから。あのときはオフサイトセンターの中にいたんだよね。いなかったのか。どこに行っていたんですか。

○ 福島 の 県内にはいた。

○回答者 勿論。このときには、ここからどこかへ移動しているわけではないと思うんです。オフサイトセンターの中のどこか、別のところにいたかもしれない。

(録画部分)

「斑目先生のやつでいいんですね」

「では、いいですか。別枠のベントラインの復旧工事は並行してやってください。その上で、皆さん、4時30分から減圧操作を開始するというので、準備できますか。大丈夫。だめだったらだめと言ってくれればいい。操作側から言うと、16時30分に操作を開始ということで、準備に来てください。(・・・)決めてください」

「(・・・)最終的に本部長にもらいますけれども、順番だけ確認したいと思います。一番右側のボードに書いてありますけれども、最初に海水から逆洗弁ピットへの運転していることを確認。これはもう運転していると思います。次が、逆洗弁ピットから2号の炉心に注入するラインができ上がったところで、④のSR弁の開操作に入る。プラスマイナスゼロで密度補正すると」

「斑目先生、そんな余裕ないんじゃないかと言っているんですよ。(・・・)がないから入れない」

「もう(・・・)やってしまおう」

「(・・・)をして、減圧操作を行います」

「何分、減圧操作（・・・）」

「ごめん、吉田さん。ベントやっている人は危険はないですか、その場所は」

「ベントのラインをやっている人は危険はないです」

「ない。はい」

「逆洗弁ピットへ」

「ないからいいんだよ。ややこしいこと言うな」

「では、指揮者ではかい声で発声してやってください。16時28分、減圧操作の指示を行いました」

「減圧操作、第一、16時28分。これはあれかな、関係箇所連絡かな。よろしくお願いします」

「済みません、通報の方、よろしくお願いします」

「通報は既実施しております」

○質問者 今、ずっと斑目原子力安全委員長からの連絡があって、それから、しばらく電話のやりとりなんかがあって、この流れを見ると、まず、電話があったのは、42番のところからですけども、本店の高橋明男さんというのは、フェローですか。

○回答者 フェローです。

○質問者 高橋フェローが吉田所長とお話したいというふうに言っているときに、ちょうどその電話に出ておられたとき、これがもう既に斑目さんとお話をされていたんですか。

○回答者 はい。

○質問者 最初、電話のときというのは、いきなり斑目さんが電話をしてくるんですか。

○回答者 このときは何かびっくりして、いきなり電話に出た、斑目も、名乗らないんだよ、あのオヤジはですね。声から、何かば一と言っているわけですよ、喚き散らしてですね。

○質問者 斑目さんがですか。

○回答者 斑目が。

○質問者 あの人、そういう人なんですか。

○回答者 もうパニックっている。これ、こうで、こういうわけだと言っているわけです。何だ、このおっさんかと思って、聞いていると、どうも斑目先生らしいなと思って、はいはいという話をしている、何ですかという話を、そうしたら、今はもう余裕がないから、早く水を突っ込め、突っ込めと言っているわけですよ。今、ベント操作しているんですけどもという話をしたら、ベントなどをやっている余裕はないから、早く突っ込めと言っているんですよ。そこからこっちにやりとり（・・・）斑目先生とか、保安院長が隣にいたんです、多分ね。

○質問者 そのときは、保安院長とか、ほかの人が代われ代われとかと。

○質問者 斑目先生がだ一としゃべる前に、結局、メインは斑目先生と話をしたんです

が、最初、斑目さんが出てきたのではなくて、だれかが出てきたんです。それは保安院長だったか、私は忘れてしまったんですけども、保安院か、どこかの人が出てきていて、そこと話をしていたら、途中から斑目さんが名乗りもしないで、こうしろということをおっしゃって、だれだ、このおっさんはというところへつながってくるんですけどもね。どうもこの声を聞いていると、度を失った原子力安全委員長だなど、何となく声のトーンからわかったということです。

○質問者 そうすると、電話の向こうにいた面々は、2号機が非常に危うい状況だということとは認識されておったんですね。

○回答者 と思います。

○質問者 それで、早く水を入れないと危ないというところで、そういう。

○回答者 ずっと前から、要するに、1号、3号、優先しているという話をして、水がピットにないから、3号、1号だよと言っているときから、官邸が2号早くやれ、2号早くやれと言っていたわけですから、それで多分、メンバーがいて、その連中がデータを見て、危ないと。うるさいって言ってるんだよ、こっちはやりたいんだ、当たり前だと。だけれども、条件が整っていないでしょうと。ベントの話もあるし、さっき言いました凝縮するにしても、100度を超えているサプレッションチェンバで本当に凝縮するのとか、炉圧が下がるのか、格納容器圧力が下がるだろうから、勿論、炉圧が上がるだとか、炉圧が下がるだとかいうことも、初めての経験ですから、よくわからないという中でやっているわけですね。

○質問者 これ、流れからすると、斑目さんは今すぐにも水を入れろということで行きますね。本店の■■■さんが言っていたことは、結局、現場の方でやっていたこと。

○回答者 そうです。早くベント、おまえが言っていることはわかっている、こうなってしまいうんです。何を言っているんだと、違うことを言っているんだらうと、それは大丈夫かどうか聞いているんだということで、この辺は完全に頭に血が上っているんですね。

○質問者 結局、そういうので、当初はそれで、この流れとしては、斑目先生、そうは言うものの、本店と現場としては、まずベントラインをつくるのが先決だよねということで、一旦そういうことでやろうという感じになっていたんですね。

○回答者 そのまま継続しようとしたんだけど、ただ、ベントがね、ここもまた■■■が登場してくるわけですけども、どうなっているんだと言ったら、なかなかできませんという、できない話が入ってくるんで、だったら今まで言っていたシナリオ全部狂ってしまうのではないかと、では減圧するしかないのかという話をしているときに、清水社長が、技術的内容を理解しているかどうか知りませんが、やりなさいということをおっしゃるわけですね。

○質問者 清水社長は、現場にこれをやれとかいうふうに、今回の一連の中では。

○回答者 初めておっしゃったのではないですか、このとき。

○質問者 それで、斑目先生の方式で行ってくださいということだったんですね。それで、

結局、それに着手をして、16時30分前後ぐらいから減圧操作を開始すると。実際、減圧操作、その後、かなり手間取ってしまったんですね。

○回答者 バルブが開かないと。(・・・)が開かない。

○質問者 例えば、その前の経験だと、3号機などは9時8分から9時20分ぐらいの間に減圧していてということで来たけれども、結局、時系列を見ますと、18時ぐらいの段階ではまだ5.4MPaで、19時03分に0.63MPaまで一気に下がっていると。4時半からだと、7時ぐらいまでは2時間半ぐらいの間、ずっと四苦八苦して、減圧操作されていたということになるわけですね。その間は、横から電話とかなかったんですか。おまえら何をやっているんだみたいな。

○回答者 それはなかったです。あったというか、ちょこちょこことですね。ビデオは映っていないですかね、その後は。

○質問者 いや、映っているのではないですかね。

○回答者 私も記憶ないんですけども、私は何せ焦っていたんで、早く減圧させると。S3が開かない、開かないと言っても、私自身、パニックになっていました。

○質問者 議事録の中で、見ていると、SR弁がどういう状況にあるのかというので、例えば、最初に起こる、ちょっと失敗したとか、いろいろ書いてあって、パワーが足りないとかですね。

○回答者 バッテリーのですね。

○質問者 ということが、ちょこちょこ出ているんですね。

○回答者 新たなバッテリーを持っていけとか、たしか、そんなことをやっていたと思うんですけども、バッテリー予備ないのかとか、それは私のイメージだと、現場で早く上げろ、早く上げろと横にせっついて、当直長に電話しているわけです。このとき、またややこしいのは、当直で上げるのか、保修で上げるのか、下らないことを言っているわけですよ。ばかやろう、何やっているんだと言って、上げろと言ったら上げるんだと、そういうことを言っていたような記憶があります。役割分担なんて話ではないだろうと。

○質問者 当直と復旧班が一緒に行っているようなものもあるんですけども、あれは結局。

○回答者 あります。運転員はものが正常になる状態では操作というのはできますけれども、バッテリーをつなげろとか、その辺は復旧班で、計装屋がフォローしないとできないんで、一緒にやっていくんです。操作どっちがやるんだとか、下らないことを言っていたので、激怒していたと思うんです。

○質問者 この後ぐらいに、要するに、SR弁がなかなか開かないというところから、夜に行くぐらいのころ、本店も含めてなのかどうかはともかく、実際の退避は2Fの方に行っていますけれども、退避なども検討しなければいけないのではないかみたいな話というのは出ていた。

○回答者 出ていますというか、これは、余りに大きい話になりますし、そこでうちの本

店から言ってきたわけではなくて、円卓で言いますと、円卓がありますけれども、廊下にも協力企業だとかがいて、完全に燃料露出しているにもかかわらず、減圧もできない、水も入らないという状態が来ましたので、私は本当にここだけは一番思い出したくないところです。ここで何回目かに死んだと、ここで本当に死んだと思ったんです。

これで2号機はこのまま水が入らないでメルトして、完全に格納容器の圧力をぶち破って燃料が全部出ていってしまう。そうすると、その分の放射能が全部外にまき散らされる最悪の事故ですから。チェルノブイリ級ではなくて、チャイナシンドロームではないですけども、ああいう状況になってしまう。そうすると、1号、3号の注水も停止しないといけない。これも遅かれ早かれこんな状態になる。

そうなる、結局、ここから退避しないといけない。たくさん被害者が出てしまう。勿論、放射能は、今の状態より、現段階よりも広範囲、高濃度で、まき散らす部分もありますけれども、まず、ここにいる人間が、ここというのは免震重要棟の近くにいる人間の命に関わると思っていましたから、それについて、免震重要棟のあそこで言っていますと、みんなに恐怖感与えますから、電話で武藤に言ったのかな。1つは、こんな状態で、非常に危ないと。操作する人間だとか、復旧の人間は必要ミニマムで置いておくけれども、それらについては退避を考えた方がいいのではないかという話はした記憶があります。

その状況については、細野さんに、退避するのかどうかは別にして、要するに、2号機については危機的状態だと。これで水が入らないと大変なことになってしまうという話はして、その場合は、現場の人間はミニマムにして退避ということをしたと思います。それは電話で言いました。ここで言うと、たくさん聞いている人間がいますから、恐怖を呼びますから、わきに出て、電話でそんなことをやった記憶があります。ここは私が一番思い出したくないところです、はっきり言って。

○質問者 武藤さんと細野さんは一緒にいるわけではないから。

○回答者 全然別です。ですから、本店です。武藤だったか、だれだったか、私も忘れたんですけども、そんな話ができるのは武藤ぐらいしかいないと思って、あのときですね。

○質問者 それに対して、お二方、武藤さんなり、本店側の人間に対して電話したときの向こうの反応はどうでした。

○質問者 別にどうということではなくて、そういう状況かということなんです。それでOKだとか、そうではないとかいう話ではないんですけども、私は、そういう危険があるよと、わかったと、そういう感じなんです。私の行動としては、廊下にいた協力企業の方のところに行きまして、みんな、よくわからないでぼーっと見るなりしていますから、この人たちを巻き込むわけにいかないと思って、一生懸命やってきましたけれども、非常に大変な状況になってきて、皆さん、帰ってくださいと。退避とは言わないです、帰ってくださいと。（・・・）帰っていただければというお話をして、あとはこっちに持ってきて、こっちも声なかったですよ、その時点。あとは待つだけです。水が入るかどうか、賭けみたいなものですから。それだけやったら、あとはほとんど発言しないで、寝ていま

した。寝ていたというか、茫然自失ですよ。

○質問者 それは、SR弁がなかなか開かないとか。

○回答者 開いたんです。開いたんですが、なかなか圧が下がらないところから、SR弁を開けるところはまだ操作ですから、何やっているんだ、どうなっているんだとなるんですけども、SR弁が開いたにもかかわらず、圧が落ちない。そら、見たことか。結局、サブチェンの方が高いですからね。落ちないんじゃないかと。落ちないで、燃料がどんどん水位が下がっていった。

もう一つは、余り時間がなかったものですから、ポンプが、消防車の燃料がなくなって、水を入れるというタイミングのときに、炉圧が下がったときに水が入らないと。そこでもまたがくっと来て、入れに行けという話をして、これでもう私はだめだと思ったんですよ。私はここが一番死に時というかですね。

○質問者 パラメータを見ると、減圧操作が一旦されたと見られる0.8とか、0.7とかいうところまで、3月14日の夕方に落ち込んできている。0.5ぐらいまでですね。それからまたしばらくすると、9時ぐらいですかね、8時54分とか、そのころになるとまた1を超えてきたり、また0.4ぐらいまで落ちてきたり、今度また1、2、3まで上がってきたり、ずっと一定になっていないんですね。結局、また入れなくなってくるんですね、この状況だと。SR弁で、こういうときは更に減圧をしてとかいうのを繰り返すとなるんですか。

○回答者 このときは、結局、何で圧が上がっているんだ、バルブ開いているのかという確認をして、多分、その操作をさせたと思うんですけども、何せ、ここは私の記憶から全部消したいと思うんです。ここを思い出すと、トラウマみたいなものですから。

○質問者 14日の、今のお話は夜中のお話になるんですね。

○回答者 19時ぐらいからですかね。実際はですね。

○質問者 パラメータを見ると、20時54分に1.170まで行って、そこから1.3とか、1.4とかまで上がっていった、また21時20分に一旦0.8、0.6、0.5と下がるんですね。しばらくそれを維持していたんですが、22時50分に1.8、23時に2.07、2.65、3.15と上がってきて、また23時30分から下がってきているようですね。一旦また下がるんだけど、今度ずっと行くと、また1を超えてしまう、2まで行ってしまおうというのが、夜中の零時から1時にかけてぐらいあってというのがずっと繰り返して、大体このころの時間帯の話になるんですかね。

○回答者 その前の段階で、一回下がったところはいいんですけども、下がったところぐらい、要するに、9時とか、ここで炉注ができていればいいんですけども、ここで炉注が整わなかったんで、ここで燃料を入れているんですよ。ここで一回、私はがくっと来てしまったわけです。何だ、水入っていないのかと。入っていかない、燃料切れましたと。ばか言っているのではないと言って、■■■■の頭をぶん殴ってという状態でさせたと。

○質問者 ようやく減圧して1を切った、21時とか、21時20分とか、そのころにちょう

どタイミング悪く燃料切れみたいなの、そういうのがあって、またやらなかったら、また上がってくるということなんですね。

○回答者 そうです。これもどこで燃料入れて、水が入ったか、覚えていないんですけども、その後、下がっているんで、やはり水が入ったと思うんです。水が入ったら、逆に、今度は、水が加熱した燃料に触れますから、ふわっとフラッシュして、それで圧力がぐっと上がってしまったという現象だと思っているんですけども、また水が入らなくなる。そういう形で若干落ちてきて、そういう現象だと私は思っているんですけども、解析をやってみないとわからないです。いずれにしても、かなりこれは損傷して、メルトに近い状態になっていると私は思っていましたから。

○質問者 14日から15日のかけての夜ですね。

○回答者 はい。

○質問者 そのときは、実際、協力企業さんたちは帰られたんですか。

○回答者 まず、廊下にいる人はほとんど帰ったと。

○質問者 当時ですと、本部に詰められている東電の社員の方々いますよね。その人たちはどう。

○回答者 本部といますか、サイトですね。免震重要棟。そのときに、■■■■君という総務の人員を呼んで、これも密かに部屋へ呼んで、何人いるか確認しろと。協力企業の方は車で来ていらっしゃるから、(・・・)。うちの人間は何人いるか確認しろ。特に運転・補修に関係ない人間の人数を調べておけと。本部籍の人間はしようがないですけどもね。使えるバスは何台あるか。たしか2台か3台あると思って、運転手は大丈夫か、燃料入っているか、表に待機させろと。何かあったらすぐに発進して退避できるように準備を整えるというのは、こんなところに出てきていませんが、指示をしています。

○質問者 それは、2号機とか4号機がああいう感じに、15日の6時になりますね。それよりももっと前にそういうふうにして。

○回答者 ずっと前です。2号機はだめだと思ったんです、ここで、はっきり言って。

○質問者 それは3号機とかよりも2号機。

○回答者 3号機は水入れていましたでしょう。1号も水入れていましたでしょう。水入らないんですもの。水入らないということは、ただ溶けていくだけですから、燃料が。燃料が溶けて1,200度になりますと、何も冷やさないで、圧力容器の壁抜きますから、それから、格納容器の壁もそのどろどろで抜きますから、チャイナシンドロームになってしまうわけですよ。今、ぐずぐずとは言え、格納容器があり、圧力容器、それなりのバウンダリを構成しているわけですけども、あれが全くなくなるわけですから、燃料分が全部外へ出てしまう。プルトニウムであれ、何であれ、今のセシウムどころの話ではないわけですよ。放射性物質が全部出て、まき散らしてしまうわけですから、我々のイメージは東日本壊滅ですよ。

○質問者 それで準備は一応、最低限の人間を残そうということで考えておられて、その



後、すぐに退避というふうになっていないですね。

○回答者 それは、水を入れに行ったわけですよ。水がやっと入ったんですよ。入ったという兆候が出たんで、そこで、水入ったというふうに喜んで、あとはずっと水を入れ続けるだけだということで、忘れてしまいました、はっきり言って、ここは忘れたいんだけど、余りここの時間を取りたくないんですけども、忘れてしまいましたけれども、やっと助かったと思ったタイミングがあるんです。

○質問者 それで、しばらくは。

○回答者 水を入れ続けるしかないんで、悪いけれども、あとは燃料補給してくれということで、ずっと燃料補給をお願いしてですね。

○質問者 水位は出ていないですけども、3月15日の1時10分から20分ぐらいの間以降、0.63とか、その辺り、ずっと、0.65とか、この辺はもう水が入ったというような。

○回答者 入っていると思っています。確実に入っている。

○質問者 それで、皆さん、退避せずに踏みとどまってやっておられた。

○回答者 そうです。

○質問者 そのころに、本店ではなくて、サイト内のある方のメモ書きなどによると、かなり詳細にそのときのことかなと思われることが書かれているんですけども、当時、死ぬか生きるかみたいな思いをずっとされて、やってきていて、5時ぐらいに菅さんが来られて。

○回答者 本店ですね。

○質問者 本店の方に。本店の本部のところで、テレビ会議室から映るところに来られた。

○質問者 あれはテレビ会議室なのかどうか、私はよくわかりません。本店の状況はよくわからないんですけども、菅さんが来るということで、菅さんの席を設けて、こちら側に取締役が座るような席がずっと映っていました。本店のビデオというが、テレビ会議の。その状態で、5時を待っていたような感じなんです。5時ではなくて、ちょっと過ぎたころだと思うんですけども、菅さんがそこにあらわれて、最初、清水社長とか、勿論、勝俣会長以下、常務以上だと思うんですが、部長もいたかわからない、私はそこは見えていないんで、本店で聞いていただくのが一番正確だと思うんですけども、いて、そこで菅さんが、何でこんなにたくさん集まっているんだと。細かい話は忘れましたけれども、かなり態度悪く、怒り狂って喚き散らしていたという記憶はあります。

○質問者 全部ではないんでしょうけれども、そのときの書き取った人なりの印象に残った言葉が書かれているところがあるんですけども、そういうことがあったのかどうかの確認なんですけれども、ここで、私があつと思ったのが、撤退はないとか、命を賭けてくださいとかですね。

○回答者 それは言っていました。

○質問者 そういうことを言っているんですね。その前に、今、話を確認させていただいたら、細野さんなりに、そういう危険な状態で、撤退ということも。

○回答者 撤退というのは、私が最初に言ったのは、全員撤退して身を引くということは言っていませんよ。私は残りますし、当然、操作する人間は残すけれども、最悪のことを考えて、これからいろんな政策を練ってくださいということを申し上げたのと、関係ない人間は退避させますからということと言っただけです。

○質問者 恐らく、そこから伝言ゲームになると、伝言を最後に受ける菅さんからすると、ニュアンスの伝え方があると思うんですね。

○回答者 そのときに、私は伝言障害も何のあれもないですが、清水社長が撤退させてくれと菅さんに言ったという話も聞いているんです。それは私が本店のだれかに伝えた話を清水に言った話と、私が細野さんに言った話がどうリンクしているのかわかりませんが、そういうダブルのラインで話があつて。

○質問者 もしかすると、所長のニュアンスがそのまま、所長は、結局、その後の2号機のとときを見てもそうですけれども、円卓のメンバーと、運転操作に必要な人員とか、作業に必要な人員を最小限残して、そのほかは退避という考えでやられているわけですね。

○回答者 そうです。

○質問者 菅さんは、それもまかりならんという考えだったのかもしれませんが、撤退はないとか、命を賭けてくださいとか、遅いとか、不正確とか、間違っているとか、あるいは、これは日本だけではなくて世界の問題で、日本が潰れるかどうかの瀬戸際だから、最大限の努力をしようとか、そんなのが延々と書かれてあるんですよ。ニュアンス的にはそういうニュアンスですか。

○回答者 そんなニュアンスのことを言っていましたね。

○質問者 来られたのは、閣僚というのは、海江田さんとかは来られたんですか。

○回答者 菅さんと、官房長官が来たのかな、海江田さんはあのときいたのかな、よく覚えていません。ここは、済みません、どちらかというと、私の記憶より本店にいた人間の記憶の方が正しいと思います。

○質問者 本店の人が記憶どおりきちっと勇気を持って言っていたのが一番いいんですけれどもね。

○回答者 言わないですね。

○質問者 もう少し私のことを信用してくればいいんです。

○回答者 そのメモは、ほとんどそのようなことをおっしゃっていると思っていただいてもいいです。そのタイミングで、うちはうちで、例の2号機のサブチェンがゼロになって、音が聞こえたので退避しますと。さっき言った意味でですね。必要ない人間は退避しますという騒ぎが朝あったときに、ちょうど菅さんが来ているときに、テレビ会議で、その辺でとりあえず(・・・)

○質問者 2号機に異変が生じて、必要人員残して退避というような、その状況のときに、例えば、菅さんなりがテレビ会議を通じて、こっちに状況を聞いてくるとか、そういうことはなかったんですか。

○回答者 このときはそれ以上のことはなくて、細野さん、これは危ないですというか、まだ水が入る前ですね。水が入らなかつたらえらいことになる。炉心が溶けて、チャイナシンドロームになりますということと、そうなった場合は何も手をつけられないですから、1号、3号と同じように水がなくなる、同じようなプラントが3つできることになりますから、凄まじい惨事ですよという話はしていました。

○質問者 それは細野さんに対して、電話でですか。

○回答者 電話しました。

○質問者 そのときは、携帯電話。ピッチか何か。

○回答者 向こうの携帯にこちらから、本店経由。本店経由というのは、うちのPHSは、■■■という、本店を回してから■■■を回すと一番かかりやすかった。■■■を押してから、携帯番号の090というのが、こっちからかけるときに一番かけやすかったんで、それでかけた。

○質問者 こっちで使うのはピッチを使うわけですか。

○回答者 そうです。

○質問者 そうしたら、本店を介して、細野さんにつながって。

○回答者 そこはダイレクトなんです。本店というよりも、回線的に本店の回線につながるだけで、通話はいきなり細野さんの携帯にかかる。

○質問者 電話の相手はいきなり細野さん。

○回答者 細野さんに話した。

○質問者 細野さんは、最悪の事態ですね、それは。それについて何か。

○回答者 ああ、そうですか、所長の言う緊急事態というのはよくわかりました、ただ、まだあきらめないで頑張ってくださいということを言って、その状態だったと思います。

○質問者 細野さんは、そうしてみたときに、電話でのやりとりが多かったんだと思うんですけども、対応として、例えば、菅さんはああいう。

○回答者 細野さんは比較的というか、常に冷静でしたね。声を荒らげることもなくて、そちらの状況はいかがですかと。こちらの情報をお話ししたときに、こういうことでよろしいですかと、厳しいかもしれないけれども、頑張ってくださいと。

○質問者 そうですね。では、例えば、意思決定などをするに当たってとか、現場でいろいろ実施をしようとするときに、そこで混乱するなどということはないわけですね。

それで、3月15日の6時ぐらいに異変が生じて、最初は2号機の圧力が一気に低下して行って、それから、衝撃音がしたということが合わさって、最初の報告のときは2号から報告が来て、2号であったんだろうという、この音と結びついてですね。その後、今度また4号の方という話も来るわけですね。しばらく人員が少なくなる。

○回答者 バスで退避させました。2Fの方に。

○質問者 このときというのは、例えば、さっきの引き続き爆発音というか、何があるかわからないから、しばらくは現場で作業とかはできないですね。ただ、注水の、例えば。

○回答者 それは、どちらかという、ストップして何したかという、周辺の放射線量だとか、そこをまずしっかり測れと。だから、何かあったと。何かあったから、まずは引き上げろと。一番重要なのは、放射線量が急激に増加する、格納容器が破れるということで、急激に放射線量上がるわけですから、それをまず確実に測定して連絡しろと。その値を見て、どう操作をするかとか、次のステップを決める、こういうことですから、まずはそういう対応をした。

○質問者 その後、例えば、パラメータとか、要するに、何が起こったかと。

○回答者 中央操作室も一応、引き上げさせましたので、しばらくはそのパラメータは見られていない状況です。いずれにしても、まずは放射線量がどうかということで、それが大きく変化するようであれば、またそれは考えないといけませんし、まずはそこをしっかりと見ましょと。

○質問者 当時はこんなのがわかっていたのかどうか、定かでないんですけども、これはどういう意味なんですか。3月16日のこの辺り、原子炉圧力がマイナス。

○回答者 データは、16日の1時ですね。2号機は、パラメータがわけがわからない状態になっていて、サブチェンがゼロからダウンスケールでしょう。圧力容器が、ドライウエルの方が高くて、サブチェンがそれより低い状態から、ドライウエルの圧力は残ったままサブチェンがゼロになって、それに引き続いてドライウエルの圧力がどんどん落ちてきた。水位はマイナスのままですね。炉圧も途中で変な値を出しているんで、逆に言うと、このブレークか何かによって、圧力計だとか、その辺の異常が起こったのかなと、こんなふうに思った。

○質問者 圧力計が仮に故障していなかったとして、圧力がマイナスの状態というのは考えがたい状況だというのがありますね。基本的にこれは圧力計が故障しているだろうと、爆発の影響で。

あと、一回退避していた人間たちが帰ってくる時、聞いたあれだと、3月15日の10時か、午前中に、GMクラスの人たちは、基本的にほとんどの人たちが帰ってき始めていたと聞いていて、実際に2Fに退避した人が帰ってくる、その人にお話を伺ったんですけども、どのクラスの人にまず帰ってこいとかいう。

○回答者 本当は私、2Fに行けと言っていないんですよ。ここがまた伝言ゲームのあれのところで、行くとしたら2Fかという話をやっていて、退避をして、車を用意してという話をしたら、伝言した人間は、運転手に、福島第二に行けという指示をしたんです。私は、福島第一の近辺で、所内に関わらず、線量の低いようなところに一回退避して次の指示を待てと言ったつもりなんですけど、2Fに行ってしまいましたと言うんで、しようがないなど。2Fに着いた後、連絡をして、まずGMクラスは帰ってきてくれという話をして、まずはGMから帰ってきてということになったわけです。

○質問者 そうなんですか。そうすると、所長の頭の中では、1F周辺の線量の低いところで、例えば、バスならバスの中で。

○回答者 今、2号機があつて、2号機が一番危ないわけですね。放射能というか、放射線量。免震重要棟はその近くですから、ここから外れて、南側でも北側でも、線量が落ち着いているところで一回退避してくれというつもりで言ったんですが、確かに考えてみれば、みんな全面マスクしているわけです。それで何時間も退避していて、死んでしまうよねとなつて、よく考えれば2Fに行った方がはるかに正しいと思つたわけです。いずれにしても2Fに行って、面を外してあれしたんだと思うんです。マスク外して。

○質問者 最初にGMクラスを呼び戻しますね。それから、徐々に人は帰ってくるわけですが、それはこちらの方から、だれとだれ、悪いけれども、戻ってくれと。

○回答者 線量レベルが高くなりましたけれども、著しくあれしているわけではないので、作業できる人間だとか、バックアップできる人間は各班で戻してくれという形は班長に。

(休憩)

○回答者 1号機のアイソレーションコンデンサー、ICが過去に動いたことがありますかというお尋ねがあつて、平成3年かな、1号機は、IC漏えいのおきに行つた可能性があるかもしれない。私は本店にいたんでよくわかりませんが。その後で、■■■■とか、そのおきにいた人間に聞いたら、ICはそのおき動かしていないので、今回がICを動かした最初だと。実動作としてですね。試運転だとやっているんですけども、実動作として動かしたのは初めてだと言つていましたので、多分、そつちが先だと。

○質問者 ほかの日本国内で見るとどうなんですか。

○回答者 アイソレーションコンデンサーを持っているのは、うちと、敦賀の1号機ですね。敦1も動かしたことはないと思うんです。

○質問者 聞いていない。いずれにしても、ICが動いたおきにどういふ挙動を示すかというおきについては。

○回答者 十分な知見がない。

○質問者 ビデオを今日の午前中から確認していただいて、これまでの委員長たちがいたヒアリングからの流れでずっと聞いてきているんですけども、まず、HPCIとRCICとIC、初動のおきの起動状況とか、起動可能状況と言つた方がいいのか、要するに、1号機はICが動いている。まず最初、地震直後ですね。2、3号機はRCICが動いているというところから入つたわけですね。津波が来て、どうだったかというふうになると、把握としては、2号機、3号機は変わらず、1号機のICも含めて、いずれも起動していて、HPCIについては、3号機は使えるけれども、2号機、1号機はちょっと使えないという状況になっているという感じなんですね。いずれにしても、生きているICとか、HPCI、3号機はHPCIとRCICで、2号機はRCICで、それが起動している間に次の手を準備して、水を入れるということをしよつと。それに併せて、今回のあれで言うと、格納容器を守るためにベントのラインも併せてということは、かなり早い段階からずっとそれを目指してやっていたということになるわけですね。

あとは、アクシデントマネジメントにいろいろ書いてあつたものですね。昨日、ちょ

っと確認していたところの、幾つか新たに備えた機能がありますけれども、基本的に電源がないとか、そういうことで、結局、使えるところで考えると、DDFPは電源が要らないからということで、あとは2Cのところの電源を復旧させたら何が使えるのかというところでやってみたら、SLCとかCRDとかが使えるところもあるというところで、それぞれの作業を中心にしてやっておられたということですね。

まず、これは人によって話がごちゃごちゃになっていたのを確認なんですけれども、1号機に関して言うと、1号機はSR弁を開いて減圧操作をするということとはされていないんですね。

○回答者 少なくとも私は指示しておりません。

○質問者 やったのは、結局、2号機と3号機ということですね。

○回答者 そうです。

○質問者 あと、これは今日のお話になると思うんですけれども、官邸から直接何か連絡があったという最初は、武黒さんはあると思うんですけれども、武黒さん以外に、東電以外でということになると、これは細野さんということになるんですか。

○回答者 細野さんです。

○質問者 それは1号機の爆発後。

○回答者 1号機の爆発後であることは確かです。

○質問者 それが3月14日までの間の、3号機爆発前の間のどこかということ、はっきりしないということですね。

○回答者 いまひとつはっきりしない。

○質問者 最初に話をしたときのお話の内容どかは覚えていますか。

○回答者 それは結構覚えていまして、それもややこしかった。うちの人間が仲介して、細野さんの秘書官の方につないで、そこから、その電話を持って細野さんのところへ行って、細野さんから電話がありまして、補佐官の細野といいます、今回の福島事故に対して首相の補佐をしておりますのでという挨拶があつて、これからいろんなことで現場の状況を直接お聞きしないといけないというのは、そのときにおっしゃった。1号機の爆発が官邸に上がったのが非常に遅れて、東電からも遅れたし、保安院からも遅れたと。ある意味でその情報の伝達に信用がならぬみたいなお話があつて、こういう状況なんで、なるべく現場の状況を直接知りたいから、所長とホットラインではないですけども、ラインを結んでおきたいと。何かあれば私に言ってくださいと。何か尋ねることがあれば、そういうところは確認しますと。ここを言っていないかわかりませんが、このことについては内密にみたいな感じでおっしゃいました。要するに、余りべらべらしゃべるなことだと思っただけなんですけれども、そういうことをおっしゃって、お願いしますということが最初あつて、そのときに向こうの携帯番号と、秘書官の携帯番号と両方教えてもらって、何かあったらこちらに電話してくださいと言われました。

○質問者 そのときは、具体的にやる個別の原子炉の状態がどうだこうだみたいな話では

ないんですか。

○回答者 最初はなかったです。ラインをつなぎますから、何かあったらというのが最初だった。

○質問者 例えば、3月14日ぐらいになると、未明から明け方にかけて、3号機の状態が、ドライウエル圧力が500とか、そういう状況がずっと続いて、退避命令をかけて、一回現場で作業している人を引き上げさせるとか、そういう状況になって、さっきも確認していただきましたけれども、NHKの報道が流れると、ストップをかけていたのが流れると、そういうようなことの話などは、その場では出ていない。

○回答者 その場に出ていないですけれども、多分、その前に連絡があった。退避するときに、向こうからかかってきたのか、こっちから言ったのかわかりませんが、状況報告はしたような記憶はあるんですよ。

○質問者 現場の状況ということで。

○回答者 現場の状況ですね。さっき危機的な状況ですと私は言っていましたけれども、あの前後で、こちらがちょっとトランジェントで、3号機でおかしい状態になっていますので、一応、御一報しておきますぐらいのことは言ったような、今、思い出してみますよね。そんな、ぼやっとですけれども、そんな記憶もなきにしもあらず。傍証がなくて申し訳ないんですが。

○質問者 基本的に、さっきのお話だと、初期のころ、事態がどんどん変わっていくようなころというのは、何か事態に大きく変化があったときとか、そういうときは、向こうから確認をしてきたり、こちらから報告したりということは、細野さんに対してはされていたんですかね。

○回答者 どこからスタートしたかわかりませんが、ある程度、現場が急変したりとかいうときは、テレビ会議をやっている、報告した後で、こんなことがありますからということ言っていたような気がします。

○質問者 通常、正規のラインだと、それはどういうことなんですか。

○回答者 これは当然、本店の本部で共有したものを、本来であれば、さっきの話で電話をつないでいますと言っていましたけれども、ああいう形で官邸にいる担当者、保安院にいる担当者に情報がダイレクトに入って、それが向こうへ共有されるというのが普通の状況です。多分、1号機の爆発のとき、そのシステムがまだうまく働いていなくて、こっちから本店に言ったんだけど、本店からの連絡が遅れたのか、どうしたかわかりませんが、そんなところで時間がかかっていたということがあったと思うんです。

○質問者 今、思い出したんですけれども、テレビ会議の最初のところに、タケグロさんが3月12日の22時59分の、これは23時と書いてあるんですね。最初のところですけども、ないですか。最初のものを出してもらえますか。かなり長々と、愚痴から入って。武黒さんはずっとこうやって演説のようにされているんですか。

○回答者 ほとんど覚えていない。

○質問者 覚えていないですか。では、なぜこういうようなことをいきなり武黒さんが言われたかというの。

○回答者 わからないな。12日の22時。12日というのは、爆発した後ですね。1号の爆発した後ですね。

○質問者 では、スタート。

(録画部分)

「大体、首相補佐官とか、副長官みたいな人が事前の仕切りをするんですね。御承知のように、大変、民主党政権は若い人たちがそういう役になっていますから、非常に優秀な人たちだとは思いますが、視野は勿論、それなりに広さがあるんだけれども、十分な奥行きとか、ためというか、感じがどうかなというのは、正直なところ、あります。ですから、非常に皆さん、独特の雰囲気なのかなと。『イラ菅』という言葉があるけれども、とにかくよく怒るんだよね。私も6～7回どつかれましたけれども、あれから比べて、吉田君のどつきなんていうのはかわいいものだなと思います。

では、どんな判断の仕方をするかという、昨日も退避、避難の区域を決めたときに、最初は菅さんとかがあらわれて、どうすればいいんだ、どうするんだと言うわけですね。私と斑目さんなどで説明すると、どういう根拠なんだ、何かあっても大丈夫だと言えるのかというのはさんざん、ぎゃあぎゃあ言うわけです。多少揺れたりするんですけども、結局のところ、何もやらないよりはいいかというので、3kmの範囲になって、夜になったら10kmになり、今日は20kmということですけども、考える軸が違うという、スタンスが違って、それなりに合理的にものごとを考えるとこうでしょうということに対して、それが持っている不確かさや危うさみたいなことをすごく意識して、もしそれで違っていたらどうするんだというようなことで(・・・)こういう感じで大体、物事が決まるという状況ですね。

ですから、今回、皆さんが非常に熱心に対応して、海水を入れましょうとか、昨日のベントをしましょうとか、避難区域を決定しましょうということで、その方針について、私が官邸に行って、官邸の状況などを踏まえながら、それから、私が得ている状況の中で、斑目さんなどと調整しながら言っていることと、本部や幹部の皆さんと認識や方向がずれなくて済んだなと思っているのは、多分、皆さんの方が非常によく考えて、そういった取り組みをかなり懐深くやっていたらいいと思います。

そういう点では、今回も最後に海水を入れるという思い切った判断で、一方、逆に水素ガス爆発が結果的には起きたということと、この2つが大変、今回の件では大きい、重たいことかなというふうに思います。このことについて、またいずれ、もう少し時間がたって、調査本部の対応みたいなどころから、もうちょっと中長期的にものごとを考えるといつかときには、是非、改めて議論をしていただいて、この議論みたいなことについて、皆さんでよく考えた防災なり、日ごろのリスク管理なり、エンジニアリングなりに生かしていっ



ていただければなと思います。

そんなことで、今回は図らずもいろんな、政府でも、日ごろと違う官邸の（・・・いろんな政治家といろいろとおつき合いをさせてもらいましたけれども、事業者としてのものの考えみたいなことをどれほどまでに相手から見て理解しやすいというか、受け入れやすい、あるいは説得される、説得できるようなものを使うというところは、それぞれ一筋縄ではいかないんだけど、今回、大きな、官邸という、非常に閉ざされたところで、余り情報が十分伝わらない中で考えることと、こちらで皆さんが考えていることに余り大きな違和感を私は感じないで済んだということについては、改めて大変助かったなと思いますし、皆さんもいろいろと受け入れていただいたことに感謝したいと思います。

同時に、極めて隔離されて、ほとんど情報も入らない、今日も3時半に爆発があったというのは、5時半に菅さんの執務室のテレビを見て、びっくりしたとか、こちら辺は、もう少し今後のことを考えると、うまい連携の仕方をしないとかつこ悪いなというのがあります。

今後はまた個別にもお願いをしておこうかと思いますが、地震対応ということを考えていると、ああいうことがどれほど全体として問題意識の中に浮かび上がった形で理解されて、情報共有なり、対応なりができるかというのは、改めて意識（・・・）というふうに思います。ということで、大変冗長ですけども、私の今回の（・・・）大変皆さんにとっても、あの大きな大きな地震で、会社にとっては大変大きな重荷を抱えてこれからまた取り組んでいかなければいけないものですけども、その荷の重さに負けないで、どうあるべきかということをつも考えながらやっていかなければと思いますので、一層の皆さんの御活躍を期待しています。ありがとうございました。」

「官邸との連絡は、反省するところもあったし、それから、さっき保安院長から情報が余り来ないというコメントがあったんで、情報の在り方は明日、少し改善しましょうか」

「問題提起していいですか」

「吉田所長、どうぞ」

「今、我々プラント（・・・）言っているし、勿論、（・・・）官邸というところにあるんですけども、今、避難している人たちの中からものすごく不満があって、東京電力が説明しに来ないというか、いつまでこんな生活が続くんだと、こういうような御不満が多々出ているようで、なかなかそれに答え切れていないなど。今後のことを考えると、多分、ものすごい、我々、今回のことで鼻つまみ者になってしまうわけですけども、このタイミングで手を打っておかないと、ますますという感じがして、ただ、そこに余り人は割けないというところが今、非常に困ったなと思っているんで、そういうところがある」

「それは考えてはいるんですが、立地地区の方と、それから、サイトの広報と相談させてもらって対応を決めたいと思うんです」

「ただ、サイトの広報はどっちかという、県と町と役所対応というか、プレス対応で目いっぱいになっていて、なかなか地域住民のところに行く余裕がない」

「行くのは本店で行くにしても、どこへ行っていいかわからないから、やはりそれは現場に聞かないと思ってですね」

「勿論、それぐらいのことはやりますけれども、とてもではないけれども、今のこのメンバーでなかなかできないところがある」

「立地地区と相談しますよ」

「今のことに関連して、昨日から斑目さんと暇なときにしゃべっていたんですが、今回、地震・津波というか、東電の発電所のことで、大変多くの人に不自由な避難生活を強いるということにもなったわけなんで、我々として今後の、先ほどいろいろ議論があった取組み、あるいはシナリオ、いろんなことの中に、こうした不自由な避難生活をしている人たちの立場というか、避難生活をどういうふうにしたら早く終わらせることができるかと。どういふ条件をつくっていくことが必要かということも視野に入れておいて、その条件づくり、あるいは環境づくりをなるべく迅速に進めていくということも必要ではないかと思いました」

○質問者 ここではちょっと切って。今、ざっと初期のころの、初期と言っても、1号機爆発後の話なんですけど、まず、ここの中で武黒さんがいろいろと雑感みたいなものを述べております。

○回答者 冗長に。

○質問者 述べられているんですけども、まず、何でこんな長々とここで武黒さんがおっしゃっておられたのか。そういう機会を設けたんですかね。

○回答者 武黒さんに後で聞いた話ですよ。このときの印象は余りないんですけども、後でお聞きしたときに、要は、地震が始まって、武黒はフェローという立場で、武藤がオフサイトセンターということで、官邸にだれか行ってくれということで、会長に指名されたのか、社長に指名されたのか知りませんが、行ったらしいんです。とりあえず御用聞きみたいな形で行って、帰ろうとしたら、また呼び止められて、結局、ずっと、11、12日と官邸に箱詰めというか、そういう状態になった。

○質問者 最初はずっと詰めているという予定ではなかったんですか。

○回答者 なかったんです。一回帰ろうとしたのが、また呼び止められて戻っていったとか、本人が言っていました。その間、ずっと菅さんに対応したり、細野さんはどうかわかりませんが、私はそこはわかりませんが、やっとなんか落ち着いて帰って来たのがここだっと思うんです。一回、本店に、本部にですね。そこでいろいろと官邸との間で意思疎通の問題があったりしたことについて、自分の感想だとかを述べたということだったと思います。

○質問者 何でこれが出てきたかという、要するに、1号機爆発のとき、武黒さんなどが書いてあるのが、3時半に爆発があつて、5時半にテレビを見て知ったとか、先ほど細野さんが情報伝達の遅れみたいな、そういうことを言っていた根拠となるようなところが

垣間見えてきて、あと、保安院長から情報が余り来ないというコメントがあったり、最初のころは現場対応と、どうするかというところで、どうしてもそっちに目が行くと思うんですね。特に現場においては当然そうだと思うし、本店の方も初めての経験ですから、そっちの方に行って、あっ、これ忘れた、これ忘れた、どうしても後追い、後追いというので、別なところから、あれどうなっているんだと言われて、ああ、そうだとやってやるのかいうことは、どうしても1つ2つ、完璧には多分できないと思うんですね。それがどんどん積み重なって行って、こういうような御発言になるのかなという感じもするんですが、今、一連の中で、基本的には本店が対官庁、対官邸との関係をどういうふうにしてスムーズにしていくかというところで、現場サイドからすると余り関係のない話になるんですね。現場と本店が密になっていけば、現場としては役割を果たしているわけですね。

○回答者 ですから、テレビ会議をしていますから、そこら辺。

○質問者 だから、そこは幸いにしてテレビ会議には特に機能に支障はなかったという状況なんですね。

あと、ここでもう一つ、吉田所長から問題提起がされていて、避難されている方の生活というところをおっしゃっておられるんですね。要するに、ここで避難を強いられている方々が不満がたまっていって、東電が何も言っていないということから、更に不満がうっ積していくと、今後の発電所の立場がどんどん孤立するということになっていくので、理解を少しでも得られるようにきちんと対応すべきではないかというような示唆をされておられるんですが、これはいつごろからそういうふうに。

○回答者 避難された方がいろんな避難場所に行かれて、勿論、うちの社員も避難した中におりますから、たまたまそこに行って、何かサポートしていた人間が免震重要棟に帰ってきて。

○質問者 東電の社員。

○回答者 東電の社員。所長、ちょっと話があるんですけどもということがあって、そのときに、行ったら、避難されている方の不平不満というか、全然状況がわからないと言っていますよという話があったんで、これはいかんかなと思って、ただ、広報にどうなっているんだと、発電所の中の広報の人間に、ちゃんと密にやっているのかと言っているんだけれども、結局、広報も除染だとかの対応に入っていませんし、防災体制ですね。いる人間はどちらかというとなら官庁だとか、連絡だとか、それでこんなになっている状態で、とても出て行って地域住民に説明するような状況にないということがあって、これは発電所でできないから、だれかにやってもらえないんで、そこは本店頼みますよと、一言で言うと、そういうことをお願いしているということです。

○質問者 これは確かに非常に重要なことだと思うんですけども、その後、どうなったんですか。

○回答者 その後、労務で地域支援室ができたんですが、その前に地域部というところが一応、広報の出せる人間、福島第二から出せる人間、あるいは本店からの人間で、いろん

な避難所の世話をする人間を決めまして、それを出して、そこで一応、住民に対して説明だとかできるような体制はつくったんです。ちょっと時間はたっていますけれども。

○質問者 時間がたっているというのは、1号機、2号機、3号機などの、次から次に事象が進展して。

○回答者 このときには、なかなかそこまで手が回っていなかったんですね。

○質問者 もうちょっと後になりますね。

○回答者 避難する方も、最初、3kmと言われて、避難場所がどんどん変わっていきますから、最初の1週間ぐらい、ばたばたしたところで、なかなか対応できていなかったんじゃないかと思うんです。私も免震重要棟の中にしかいませんから。

○質問者 今、ちょっとお話が出たついでなんですけれども、本部要員というのは女性の方は入っていないんですか。

○回答者 基本的には中には入っているんですけども、今回のような、放射能が出て、放射線ということになりますと、なかなか残せない状況があつて。ただ、何人か出てきてくれているんですが、その人たちが女性で内部被曝をしたということで、最初、新聞でたたかれた。新聞でというより、厚生労働省ですね。彼女たちは、免震重要棟の中のものすごく重要な役割をしていたんです。いずれにしても、被曝してからは女性は勿論入れないと。

○質問者 平時は女性の方も勤務されていますね。この方々はもう異動になったんですか。

○回答者 その後、駐在という形で、人によってなんですけれども、福島県地域支援室でしたか、そこが組織としてできて。

○質問者 東電の中にですか。

○回答者 東電の中に。

○質問者 それは本店にできたんですか。

○回答者 正式に言うと本店組織なんですね。そこに、まずは駐在で行って、いろいろお手伝いして、7月に正式に辞令を出して（・・・）

○質問者 では、現場に戻ってきて、もとあった所属のところということはない。

○回答者 していない。女性の場合はですね。

○質問者 例えば、第一保全部の中に入っていた、保全部の人などは現場で作業をばんばんやらなければいけないような人たちですね。もともとは保全部にいた人も、地震・津波の後、避難をされて、そのままそういうところで働かれてということになるんですか。

○回答者 それはパターンが幾つかあつて、福島第二の安定化センターというのができましたので、あそこに所属して、ある程度技術的な仕事をそこでしてくれるような人もいますし、もっとインフラというか、食事だとか何だとか、そういうところの仕事をしてきている人もいて、千差万別なんです。中には、地域支援室に行つて、避難民の方のお世話だとかをしている人もいます。

○質問者 その辺の世話とかというのは、国や自治体などと連携してやっている。東電だ

けということではないですね。

○回答者 ではないです。私はこっちにずっといるんで、あそこの中はどんなお仕事をしているか、よくわかりません。

○質問者 あと、1号機が爆発後、このころというのはまだ、今後、どういう進展、1号機も含めて、2号機、3号機なども、どういう事象が出てくるのかよくわからないという状況で、それが何日で収束するのか、とにかく1号機はこうやって爆発してしまったという、この状況の中で、今後の体制というか、1つは、今でこそという話かもしれないんですが、人が線量などが増せば、1号機の経験を踏まえると、1号機のとときの経験というのは、結局、ベントを開けるときも、当直班の人たちが2人1組で3班体制みたいな、そういうことで、1回行って帰って来て、また1回行って帰って来てみたいので開けられなかった、そういうような、非常に苦しい経験を踏まえての12日の夜だと思っんです。そうすると、今後、そういう事象が生じたときに、人が足りない。そうしたら、そういうときにはどこからそういう人員を出すとか、あるいは圧倒的に物資が少ないわけですから、物資関係についてはどこから調達をするとか、その辺りのところは、12日の夜の段階はそういう話などはされているんですね。

○回答者 していますよ。もっと前々からしていると思います。

○質問者 11日の夜とかには、もう人がいない。

○回答者 要するに、これから先、極めて緊急事態で、今、発電所はこれだけしかいないし、線量が増えてきたのは11日の夜からですし、ああいう状況を見ているから、単純に言うと、放射線管理をする人間がもうパンクしてしまっているわけです。汚染区域に入って帰ってくるのをサーベイするだとか、まずは必要なのはそういうサーベymanが必要だし、それから、実際に現場で操作するのは運転員なんですけれども、これはまだ呼び集めていない運転員がいましたから、それをどうにかするかとか、あとは物資はずっと言い続けていますけれども、水とガソリンと軽油、これは必須で早く欲しいし、消防車も欲しいと、ずっと言い続けていました。

○質問者 電源なども。

○回答者 勿論、電源車、バッテリーもですね。

○質問者 恐らく、そのオーダーを受けた側、あるいはオーダーを受けて発注して、その発注を受けた側の方々からしても、すぐに行きたいんですけども、なかなか交通事情とか、聞いてみると、私、南明興産の方に、柏崎から1Fに来るときの道中のことをお聞きしたんですけども、出た瞬間、雪がわあっと降っていて、そこに消防車が行列のようになっていて、要するに、いろいろなところに行かなければいけない。1Fだけではなくて、いろんな被災地などがあって、それが全国から東北を目指して行っているんで、大渋滞でということなんで、なかなかそういうところがあるんでしょうね。向こう側の都合もあるんでしょうけれども、詳しい情報は、言葉で聞いても、実際に見ていないから、現場の方としても早く来い、早く来いという状況ですね。そういう状況の中で、いろいろ見ると、1

号機の時もそうだったんですけれども、1つ、例えば、医療というんですかね、医師の手配というんですか、そういうものはお願いとかされましたか。

○回答者 お願いしました。医師に関して言うと、福島第二にうちの委託の先生がいらっしやあって、何かあったら福島第二に行って、その先生に診てもらおうということで、当座はそれでしのいでいって、そのうちにJヴィレッジに医療設備といたしますか、もともとJヴィレッジに医療棟があって、そこに先生を常駐させるというのが結構早い段階ででき上がった。それから、オフサイトセンターが本来、医療関係のミッションでやるんで、最初、そこにもそういう方がいらっしやったと思うんです。

○質問者 オフサイトセンターはそういう役割なんですか。

○回答者 勿論あります。緊急被曝だとか、そういうことも想定していますから、スタッフの中に医療関係の人も入っているという形になっていた。私たちの記憶では、放射線医学研究所の先生が最初からいらっしやったと思うんです。それはオフサイトセンターの人間に確認してもらえればいいんですけれども。

○質問者 2Fのおられた先生、今回、3号機とかが爆発を起こしたときにけがをされた方がいますね。線量の問題もそうですけれども、外科的な手当が必要だと。

○回答者 外科はその先生は無理です。診察して、Jヴィレッジの診療班に持っていったり、もしくは病院にということで、今でこそJヴィレッジが中核で、けがした人は磐城共立病院だとかに送る段取りが整っているんですが、当初は非常にひどくて、うちの運転員もヒアリングされたかどうかわかりませんが、彼は1号機の爆発で左腕を折ったんです。彼はその後、悲惨な思いをして東京に帰ったんです。2日間ぐらいかけてヒッチハイクしたり。汚染していますから、服を全部はぎ取られて、寒い中を下着1枚で歩いていくとか、そういういい物語があるから書いてくれと言って、メモはつくらせていますけれども。

○質問者 それは病院に行かれた後ですか。

○回答者 たらい回しなんです。それはオフサイトセンターかどうかわからないけれども、運んで、そうしたら、大野病院に行けと言われて、大野病院も先生がいなくて、もぬけの殻で、郡山に行けと言って、郡山に連れていったら、本当は(・・・)がついていないといけないんですが、一人でほったらかされて、郡山に行って病院に行ったんだけど、そこで応急手当はしてもらったんですけれども、被曝したり、汚染しているんで、受け入れられないみたいなことになって、福島県で一泊して、そのときに服をはぎ取られたんです。下着1枚で夜道を歩いて、しまむらという衣料品店ありますね。そこのおっさんが余りにもかわいそうだというのでジャンパーと何か恵んでくれて、家族とたまたま連絡がついて、福島空港から東京に切符を手配してもらって、その切符で東京に戻ってきて、それから東電病院へ行って、東電病院に行ったら、今度は放医研へ行けと言われて、東電病院というのは冷たい病院だなとつくづく思いました。いずれにしてもそんなんで、骨を折れたままですよ。そんな状態になって、私は全然そのときは知らなかったです。

○質問者 手当てはされたんですか。

○回答者 応急手当てをするまでに時間がかかったですから、血を出しながら、こんなになりながら。彼の話聞いてもらえば、当初はどれぐらいひどい状態だったか。

○質問者 ■■■さんは、その後はまた現場に。

○回答者 東京に行きまして、東京で治療して、復帰して、東京でしばらく仕事をしてもらって、今は安定化センターということで、こっちに帰ってきています。

○質問者 今は元の、遜色なく。

○回答者 腕もそれなりに復帰して、普通にやっていますけれども、精神的にはかなり大変だったと思います。

○質問者 それも、1つは、当然みんな避難しているから、周りにお医者さんもないわけですね。

○回答者 いないです。

○質問者 その後、3号機とかが爆発されたときも負傷された方がおられますね。そういう方々は。

○回答者 3号機ぐらいから、負傷した人をまず2Fに送って、2FからJヴィレッジに戻って行って、そこから病院に運んだとかいうような体制が整ってきたのが、やっと3日後ぐらい。14日ぐらいですね。だから、12日ぐらいはまだそこも全然、だれがどういう責任で何をやるなどというのは全然明確ではないですから。彼らはある意味でものすごい被害者だと思います。

○質問者 そうですね。自衛消防隊の隊長をやられていた人ですね。

もう時間もあれなので、今日、4回目ということになるんですけども、一応、一通りざっと、全部で20時間近くになりますけれども、おつき合いいただいて、思い出したくないことも思い出していただいて、いろいろとお話を聞かせていただいて、どうもありがとうございます。今後、こちらは、特に私なんですけれども、本店の方だとか、あるいは国の方の人間にお話を伺う中で、場合によっては所長のお話を裏づけというか、その人たちが真実をお話ししていただいているのかどうかを見極めるために、所長にもお話を打ち返して聞かなくてはならない場合が出てくるかもしれないですけども、その場合、東電を通じて、本店の方からお願いすることになるかもしれないんですけども。

○回答者 結構でございますので、いつでも遠慮なく。

○質問者 済みません。また引き続き御協力よろしく申し上げます。あと、多くの部下、職員の方々にこの調査に協力させていただいて、非常にこちらも助かっておりますので、また引き続き、こちらもなるべく今の作業に支障がないような形でできるように加減したいと思いますので、済みませんが、よろしく申し上げます。

○回答者 こちらこそ、本当に協力させていただきます。

○質問者 では、一応、一通り、一旦、これで終わりということにしますので。

○回答者 わかりました。

○質問者 どうもありがとうございました。

○回答者 どうもありがとうございました。